

鳶土工マン ～知を固め、天に架ける～

本名：鳶沢 昇（とびさわ のぼる）

出身地：神奈川県川崎市

（工場地帯と再開発地区が混在する下町） #5

鳶沢昇は、鳶職の家系に生まれた三代目だ。祖父は戦後復興期の足場鳶、父は高度経済成長期から平成の大型建築を支えてきた現役の鳶職人の元育った。卒業後はなんとなく地元の工場に就職するが、単調な仕事と人間関係に馴染めず、1年で退職。その直後、父が現場で大きな事故に遭う。幸い命は助かったが、長期離脱を余儀なくされた。見舞いの帰り道、昇は初めて父の言葉の重みを理解する。「現場は、人の人生を背負っている場所だ」20歳の春、昇は父に頭を下げた。「鳶をやらせてください」父はこう言った。「俺の現場じゃ使わねえ。他所で一人前になってから来い」こうして昇は、縁もゆかりもない鳶土工会社に住み込みで入社。最初の仕事は、足場でも高所でもなく、掘削・埋戻し・ガラ出し。真夏の炎天下、真冬の泥水。何度も辞めかけたが、「逃げたら一生、下を向く」と歯を食いしばった。25歳を過ぎるころには、鳶作業、土工工事、重機周りの段取りすべてを任される存在に成長。危険を察知する勘、新人への面倒見の良さ、現場全体を見渡す視野。気づけば、職長補佐として現場を回す立場になっていた。「安全だけは妥協しない」それが鳶沢昇の流儀だ。父とは今、同じ現場に立つこともある。多くは語らないが、並んで空を見上げる足場の上で、昇は確かに“鳶の血”を受け継いでいる。

